

No. J2213

太平洋島嶼諸国における祭祀儀礼から生活実践までの身体技法と  
その継承方法の人類学的研究-フィジー共和国を中心に-

北九州市立大学大学院社会システム研究地域社会システム専攻  
緒方 良子

本調査は南太平洋島嶼諸国における祭祀儀礼から生活実践における身体技法とその継承方法に焦点をあて、フィジー共和国およびソロモン諸島における小さな共同体でどのように身体知が継承されるのかについて明らかにすることを目的とした。「学校で修得される伝統舞踊などの身体技法」として舞踊学校での伝統舞踊の修得過程、「生活技能としての身体技法」として樹皮布づくりの修得過程を比較し、自身も実践共同体に参加しながら修得を目指した。舞踊学校では、カリキュラムに沿った修得がすすめられ、教授者と学習者の関係が明確で言語的な教示が中心であった。一方で、生活技能として着目した樹皮布づくりの技法では模倣が主な修得方法であり、ほとんどの人々が「教わっていない」と語った。教授者と学習者の関係性は曖昧であり、非言語的に幼少期からゆるやかに継承されていた。しかし、生活技能としての身体技法の継承においては、技法が埋め込まれた社会状況の影響を大きく受けていることが明らかになった。フィジー共和国は慣習的に樹皮布を利用する社会的背景をもつ。そのため樹皮布の換金率が高く、樹皮布づくりが村の主な生業となり人々の暮らしをさせていた。一方、ソロモン諸島では樹皮布づくりは十分な現金収入にはつながらず、若者の興味が離れるなど継承の難しさに直面していた。

本研究の成果として、2024年3月におこなわれた生態人類学会で「樹皮布づくりの比較からみた差異と共通点—フィジー共和国およびソロモン諸島の事例より」というタイトルで発表をおこなっている。加えて同年5月に国立民族学博物館でおこなわれた、みんぱく50周年記念国際シンポジウム・海域からみる人類の文化遺産において「ソロモン諸島およびフィジー共和国における樹皮布文化の多様性と継承」というタイトルで発表をおこなっている。この国際シンポジウムは2日間で700名の参加があった。今後の予定としては、2024年6月には文化人類学会で樹皮布づくりの身体技法と女性の生との関わりについて発表予定である。また、すべての調査成果をまとめたものを博士論文として今年度執筆をおこなう予定である。